

---

研究分野のキーワード：音楽心理学（実験系）、音楽科教育学、授業研究、学校吹奏楽、楽器（ファゴット）

#### 研究紹介

学校音楽教育に係わる分野と、音や音楽に対する反応や行動を分析的に捉える実験系音楽心理学の分野、そしてファゴットと言う管楽器の演奏を専門にしています。

学校音楽教育分野では、小中学校の音楽の先生方と研究チームを作り、授業構造について研究を進めています。時々「音楽の授業は計画的に行うものですか？」と尋ねられますが、少なくとも授業を運営する側としては、出たところ勝負で対処療法的に音楽活動をリードすることはできません。相手をよく知り、相手の長所を伸ばし短所を補う、つまりできるだけストレス・フリーに子どもの音楽的成長を促進し、子どもの中に音楽的なお土産を残すためには、その「やり方」という方法論が存在しており、小中学校の先生方は「やり方の引き出し」を数多く持っていて、薬剤師のように相手に最も合った「やり方」を組み立てています。これを私達の研究チームでは「計画的臨機応変」と呼んでいます。現在は、『音を出すことだけが表現ではなく、それ以前の楽譜と向き合う段階から既に表現活動は始まっており、音の動きや微細な変化から様々な音楽表現の違いを感じ取り聴き取ることも表現活動である。そして音を出す行為、楽譜を読み解く行為、楽譜と向き合う行為の全てが鑑賞活動の一部である』という考え方に基づき、表現と鑑賞が一体化し相互に触発し合うような音楽活動について、研究授業を通じて実践的に研究を深めています。

実験系音楽心理学分野では、まず『学校吹奏楽と音楽的能力の成長』というテーマは、しばしば囁かれる「吹奏楽部では音楽は伸びない」ということが本当なのか、客観的に確かめてみたいと思い取り組みました。次の『音と動作タイミングの関係』では、例えばマーチングバンドで「軽いステップ」というのは、現実にはどのような状態になっているのか、音と動作の関係を分析的に解明してみたいと思いました。結果は、提示されたビート音にぴったり手足の動作を合わせた時、現実には手足の動作の方が約 30 ミリ sec. 先行しています。CG で描かれたキャラクターが音楽に合わせて踊っている時、動作が遅れているように見えるのはこの理由に因ります。さらに『ピッチの聴き取り方とフラットシンギングの関係』は、演奏者としての自分自身の姿を知りたいと思い取り組みました。練習を録音して聴く方法は有効ですが、写真を見て自分の姿を判断するのが難しいように、録音も演奏の一部しか再現してくれません。結果は、歌う時にはピッチのズレを知覚しにくい低い方向へ外れて声を出してしまい、聴く時にはそれを補おうとして実際はピッチが高いのに低くズレていると誤って知覚してしまいます。ピッコロのピッチが低く聞えてしまうのはこの理由に因ります。以上のとおり、音楽科の授業づくりと、音に対する人間の反応や行動を実験的に解明すること、そしてファゴットの演奏を専門にしています。